

幼稚園で

画用紙の切れはしに、私は錯画のような線かきをしていると二人の男の子が寄ってきた。こういうとき、どんな子どもでも、このくらいなら自分でもかけるという気を起すことが出発点になるので、私は、形のあるものをかかないことにしている。この日も、はじめのうちは、「なんだ、こんなの」とか、「ぐしゃぐしゃにしちゃうぞ」とか言って、私のかいた線の上にクレヨンを叩きつけたりしていたが、画用紙の切れはしを何枚も机の上に出しておく、いつのまにか、それぞれ、一見わけのわからない線をかきはじめた。

一人の子どもは、「みみず」と言って、

長細い形をかきはじめた。「なめくじ」

「毒がある」など言いながら、次第にいいいにかく。この子どもは、泥んこが好きで、土をべたべたにして遊ぶ子どもである。私はこの子がみみずやなめくじをかきはじめたのを面白く思った。

もう一人の男の子は、「こわいのだぞ」「もつとこわいのかく」と言って、うすくひろひろした線をかいていた。そのうちに、目に放射線を何本もかいて、「どうだ、こわいだろう」と私にみせる。この子どもはよく私にとびかかって暴れる子どもである。「目」と「こわい」ということと関係があるのだろうか。一時間近くこうして坐っている間に、画用紙の切れはしにかいた何ということもない画であるが、両方で十二枚にわたった。私は自分が坐っていたところから、

この二人の男児の画のシリーズが生れたことに満足を感じた。そして、この日はきつと、この子どもたちは家に帰ってからも、落着いてきげんがよいだろうと信じた。こういうことは保育者はだれでも経験しているであろう。けれども、他の人にはだれも分らないことである。母親にも分らないことである。幼稚園の保育効果というのは、こういう目に見えないところにある。子どもだけはそのことを知っていて、その次に会うときには親しみをもって寄ってきてくれる。

国際児童年であったこの年も終る。目に見えないところで日日子どもの生活の支えになっている保育者に、よき年が訪れるよう願うものである。(津守 真)

* *